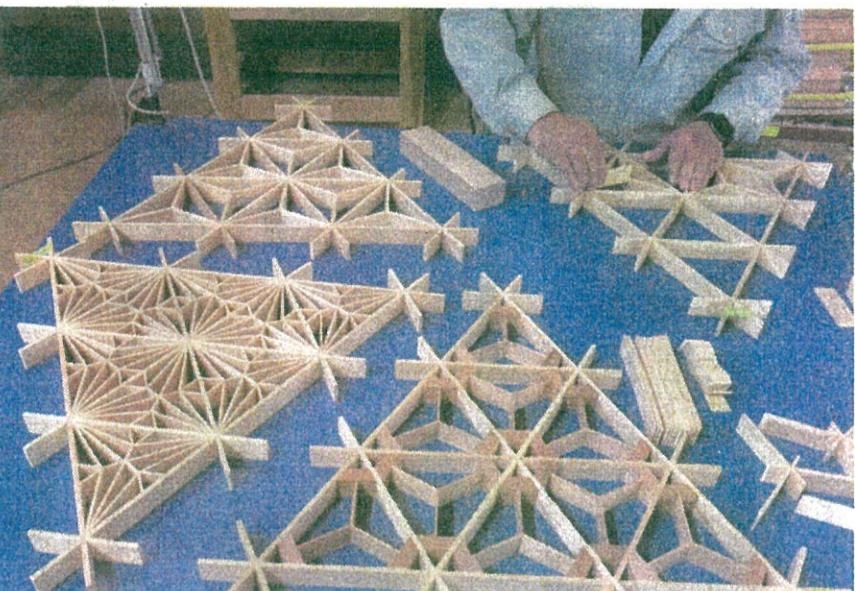


第74回「全国植樹祭」の式典
(国土緑化推進機構・岡山県主催)が今年5月26日、ジップアリーナ岡山(岡山市北区)で開かれ。天皇皇后両陛下をはじめ、県内外から大勢の来賓や来場者を迎えて記念植樹などが実施される。岡山県では57年ぶり2度目の開催となり、着々と準備が進んでいる。

背面パネルと入場門を製作 全国植樹祭で 両陛下の「御座所」



CLTゲート制作に取り組むメンバー



桜、コスモス、麻の葉の組子装飾

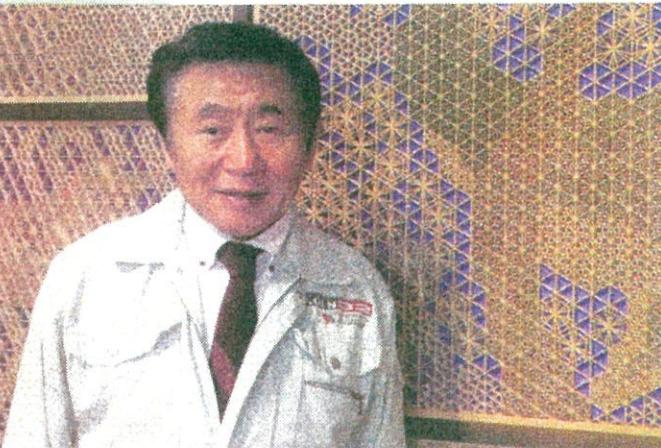


御座所背面パネルの制作を行うメンバー

デザイン考案・真庭の佐田建美 佐田時信社長(72)

「麻の葉」「桜」「コスモス」

模様を古来の木工技法組子で



斬新なアイデアで多様な活躍を見せる佐田社長



組み立てられたパネルの一部

金剛で両陛下がお掛けになる「御座所」の背面パネルと入場門の製作を手掛けるのは、真庭市下方の建真家具製造会社・佐田建美。2022年のコンペに応募し、両案が採用された。デザインを考案した佐田時信社長(72)は「1級建築士やデザイナーたちがいる中で、まさか2件とも採用されるとは驚いた。以前から職人として持てる力を振るい、皇室のために仕事ができるば」という強い憧れがあったので、機会に恵まれてうれしく思つ」と意気込む。納入に向けてスタッフ一同も渾身(こんじんしん)の力を込めて取り組んでいる。パネルは県の三大河川「吉井川、旭川、高梁川」をコンセプトに、繁栄・成長を象徴する「麻の葉」や河川付近で咲く「桜」「コスモス」の模様を古来の木工技法「組子(細工)」で施している。入場ゲートはCLT(直交集成板)を組み合わせた六角形型のアーチが連なる趣深い構造となつており、いずれも気韻生動する存在感を放つ。いずれも岡山県が全国最多の生産量を誇るヒノキ材を活用している。

佐田建美は、和室の欄間や障子に用いられてきた組子を美術品に昇華させ、地元の名を冠した「真庭組子」としてさまざまな商品を開発。これまでに細い木片を組み合わせつくる幾何学的な模様、緻密な装飾は多くの人を魅了し、作品の一つが東京都の玄関ホテル「The Okura Tokyo(オーロラ東京)」のロビーを飾る。また「木製スーパー・カーペット」などユニークな作品も発表。200件以上の国内外のメディアに取り上げられて話題を呼んだ。

世間に驚かせる斬新な発想はどうか

らうのだろうか。佐田社長は「形や形式にとらわれず、思い」を大事にしている。「瞬の思いつきやひらめきで仕上げた作品と、普段から考えを巡らせ、思いを蓄積させてでき、作品とは作り込み、完成度が違う」と強調する。

植樹祭に向けて公募されたデザインは「岡山県を象徴するもの」がテーマ。市町村に關連するもの、「3本柱」による主題を考えた。その時、地元を流れる旭川を見て、「川は県三大水系を起点に支流が枝分かれ流れ、各市町村の土地を走るおじい」という点に着目。そこから河川付近について調べ、想像を膨らませ

マ。「コンセプトになる“物語(ストーリー)”が必要」と県内の金27市町村に關連するもの、「3本柱」による「物語」を強調し、この“物語”が決め手だったのかもしない」と話す佐田社長。「時代が変化する中、長く仕事を続けていくにはアイデアを提案する力を持つことが必要とされる。夢や憧れ、目標を持ち、いざチャンスが来た時にどう行動するのかが成功の秘訣だと思つ」と日々の努力と試行の積み重ねの大切さを述べた。

また、夢を実現する好機を得るきっかけとなった人ととの“縁”についてもふれ、「今回応募してきたのも、県木材組合連合会と県建築士事務所協会が教えてくれたおかげ」と感謝の気持ちを示す。自身が心に留めているという徳川将軍家の剣術指南役を務めた柳生家の家訓「小才は縁に出合つて縁に気付かず、中才是縁に気が付いて縁を生かす、大才是袖通り合つた縁をも生かす」を振り返りながら、「偶然の出会いも大切にしていくといつか深いつながりへと発展する。改めて人とのつながりの大切さを感じている」と語った。